

盛岡市中心部に位置する上田中学校は、創立以来、長きにわたり教育実習校として地域の教育に貢献してきた。各種の研究指定を含む公開研究会の開催にも積極的に取り組んでいる。生徒数458名、佐藤恭孝(さとう・やすたか)校長。

岩手県盛岡市立上田中学校

文字と言葉があやなす 道徳実践を訪ねて

子どもたちのコミュニケーション能力の弱まりが指摘されるようになってすでに久しい。「自分の気持ちをうまく表現できない」「悩みや苦しみを分かってもらえない」「そんな思いは、誰よりも子どもたち自身を苦しめている。胸の中の思いを共有し、共に悩み笑える心を育てるため、文字コミュニケーションを触媒として生かした道徳の授業を取材した。

取材・撮影・西尾 琢郎

パソコン室に集い 合唱で始まる「道徳」

秋の晴天に恵まれた取材当日、岩手山から吹き下ろす風が吹く中、上田中学校を訪ねた。今回取材するのは3年生の道徳の授業。『ジャストジャンプ3@フレ

ンド』を使うと聞いて、最初に思いうかべたのは情報モラルの授業だが、どうやらそうではないらしい。一体どのような授業が見られるのだろうか。胸ふくらませて、私たちは校門をくぐった。

上田中は1951年の開校以来、教育実習校の役割を担い、かつ、1960年代後半



生徒たちのパソコンには、それぞれ自由な壁紙が設定され、デスクトップの表示設定も思い思いに変更されている。自分の机でありノートである——そんな思いが感じられた。

以降、繰り返し道徳教育の研究指定を受けてきた伝統を持っている。

この日の授業を受け持つ、3年4組担任の坂本先生も「上田中に赴任が決まったときには、身が引き締まる思いでした」

と語るほどに、積み重ねられてきた実践とそのノウハウは、地域の教育に大きな影響を与え続けているのだ。

校内に足を踏み入れるや、清掃の行き届いた様子や、明るくあいさつしてくれる生徒たちに「さすが」の思いを抱かされる。しかも、そのたずまひは「厳格」といったイメージより、むしろ明るくほがらかなものであることが強く印象に残った。

早速、授業が行われるコンピュータ室へと足を向ける。授業開始時間を前に、3年4組の生徒たちも、次々にコンピュ

ータ室へとやって来た。

「こんにちはー」

ここでも元氣なあいさつに出会えたのがうれしい。さあ、いよいよ授業のスタートだ。

教壇に立った坂本先生は、日直の号令によるあいさつを終えると、こう指示を出した。

「はい、それではまず合唱をやりましょう。みんなは廊下側に並んで。指揮者は前に出て指示をお願いします」

授業の冒頭に合唱！ 3年4組の道徳は驚きのスタートを切った。

あるクラスメイトの 思い

ソプラノ、アルト、テノール、バスと素早くパートごとに整列した生徒たちは、指揮者の合図で見事な歌声を披露してくれた。



授業冒頭、声を合わせて歌った合唱。その直後に坂本先生が発したのは「合唱について誰かに言いたいことはありますか」という問いだった。困惑気味にアンケートに答えていく生徒たちの様子がうかがえた。

聞けば、上田中では文化祭である「上中祭」を間近に控えており、同時に行われる校内合唱コンクールに向けた練習が、まさに今佳境を迎えているとのこと。なるほど整然と整列し、よどみなく歌えたのも納得できる。しかし、道徳の授業と合唱との関係は一体……興味は膨らむばかりだ。

歌い終えた生徒たちは、先生の指示でのおの座席に戻り、パソコンを起動する。見ているとそれぞれの生徒が、デスクトップの壁紙など、思い思いの作業環境を手早く設定していく。その様子からは「自分の学習机」という思いが感じられ、ここにも、型や枠にはめるのとは違う、日常の生徒指導のあり方が透けて見えるように思われた。

パソコンが起動すると、続いて坂本先生から指示が出された。

「では、先生が用意したアンケートのプログラムを開いてください。先生からの質問がありますから、それに回答してください」

そこにはこんな質問が並んでいた。

- 今の合唱はどうでしたか？
- 今朝の合唱はどうでしたか？
- 合唱について誰かに言いたいことはありますか？

「今の合唱」とは、まさにたった今、授業の冒頭に歌われた合唱のこと。「今朝の」とは、コンクールに向けて、この日

の始業前に行われた練習を指すに違いない。では「誰かに言いたいこと」とは？ 多くの生徒は、先生の意図を図りかねるような表情でアンケートに答えていく。「それぞれの問いについての回答の比率は画面右側で見られるから、みんなも見てみてください」そう説明し、さらに回答を促す坂本先生。

ひととおり回答が終わったところで、先生はこう切り出した。

「今の合唱にも、朝の合唱にも、納得できていない人がいるね。言いたいことがある人も結構いるなあ。それじゃ、言いたいことがある人は、手を挙げて言ってみてください」

静まりかえる教室。手は挙がらない。それを予期していたのか、坂本先生は次のステップへと進んでいく。

「誰かに言いたいこと」そんな坂本先生の問いの意味が明らかになったのは、クラスメイトの思いが記された文章がモニターに表示された瞬間だ。思うように進まない練習、ひとつにつれないみんなの気持ちに対する切なる声

が、生徒たちの胸を打つ。



口には出せない だけど……

「みんなのクラスメイトに、こういう日誌を書いてくれた人がいます」

そう言つて先生が画面に投写したのは、クラスのある生徒が日誌に書き記した、合唱練習への思いだった。上田中では、すべての生徒が毎日のできごとを日誌に記して提出する指導が行われているという。

「ここにはこう書かれています。『課題は分かっているのに、どう言つたらいいか、どう進めたらいいか分からない。話せば分かってくれる友だちはいらぬのに、自信を持つて話せない……』さて、この人はどうして自分の思いを口に出せないんでしょう。皆さんにもそんな体験はありますか？」

坂本先生はそう問いかけると、今度は『たわるねつとTeen's』の掲示板を開くように指示。掲示本文には、先ほどの日誌の抜粋が表示され、生徒たちはそれに対する自分の考えをメッセージとして書き込んでいく。

「口に出して言ったことに、どういう反応が来るか分からないから」批判されることとが怖いから」など、さまざまな意見が寄せられていく。中には「なぜ言えないか」という問いに対してではなく、日誌文冒頭の「合唱つて何だろう、賞つて何だろう」という問いに対して、自分の思いを書き込む生徒も見られた。

先ほどは挙手こそ見られなかったものの、生徒たちは決して「考えていない」「思っていない」「感じていない」のではないことが、メッセージの真剣さからひしひしと伝わってくる。

文字と言葉を 行き来して

ここで、坂本先生は改めて挙手と発言を求めた。生徒たちは、先ほどとは明らかに違う表情を見せながら、それでもまだ挙手は見られない。

しかし先生は動じない。

「みんな分かつてると思うけど、誰が掲示板に何を書いてるか、先生には見えてるからね」そう笑つて、指名して発言を求めていった。

練習に遅刻し、悪い思いながらその態度に示せなかった生徒。指揮者になりたいという思いがかなわなかった生徒。それぞれの思いが、少しずつ引き出されていく。

ここで先生は、先の日誌文の続きである中盤部分を提示。そこには書き手の「言えなかった思い」がつづられていた。

「今日の音楽の授業で使われたプリントをあつめて、読んでみた。(中略)みんな私が思うより深く考えてた。私は1人だけじゃないと思えた」

食い入るように画面に見入る生徒たち。今、一人ひとりの胸にあつた思いが、ひとつの文章を触媒としてあらわになり、

触れ合おうとしている。

「さあ、それじゃあ今度は『たわるねつとTeen's』のチャットルームを開いてください。3つのチャットルームが作つてありますから、自分の好きなテーマの部屋で、自由に話しあつてみましょう。参加は本名じゃなくハンドルネーム——自分の好きな名前でもいいですよ」

先生が設けたチャットルームは次の3つ。

- みんなに聞きたい
- みんなに言いたい
- 最高の学級

一斉にキーボードに向かう生徒たち。授業のクライマックスだ。

平気じゃ いられない

「朝練習に遅れて済みませんでした」
「今しかできないんだし、もう一生こんなことないと思う」

「自分が(指揮者に)選ばれなかったのはなんでだと思ふ？」

悔いが、決意が、悔しさが、どんどん流れ込んでくる3つの小部屋。

最初は1人のつぶやきだったものが、小さな波紋となり、文字と言葉とを行き来する間に、次第に大きくなつていったこの時間。今、このチャットルームでいくつもの波が重なり合い、混じり合つて、ひとつの学級の姿をパソコン画面という水面に描き出そうとしているかのように

本時：道徳「合唱コンクールについて 意見を交わそう」

1 導入

クラス全員で校内合唱コンクール課題曲を合唱。今日の合唱は自分たちが合唱コンクールに向けて進めてきた取り組みについて、何か言いたいことがあるかと発問し、アンケートで生徒たちの意向を把握。

2 テーマの把握

「こんなことを言いたいという仲間がいるよ」と日誌の抜粋を提示。その文が訴えている「言えない」理由について思うところを、「たわるねつとTeen's @フレンド」の掲示板機能で引き出す。

3 対話の糸口

アンケート結果を基に生徒に挙手発言を求め、さらに「言いたいことがある」とおぼしき生徒を指名。口に出しての発言がなかなか活発化しない状態を、生徒自身にも自覚させる。

4 対話の深化

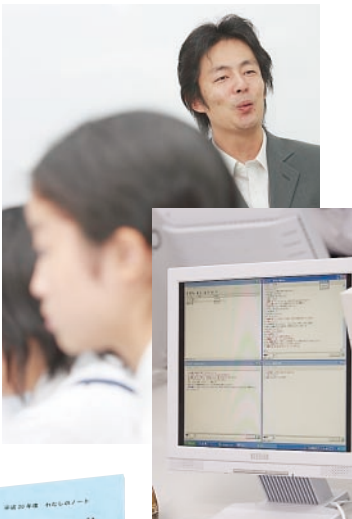
「たわるねつとTeen's @フレンド」のチャットルーム機能を使って、より生徒たちが本音を出しやすい環境を作る。テーマ別に3つのチャットルームを設定し、匿名で書き込みを行うなどの配慮をする。

5 まとめ・学習感想

チャットルームでの発言を受けて、生徒たちの思いをすくい上げる。さらに、テーマ素材とした日誌に記された思いに共感する声などを取り上げ、さらにテーマ文の残り部分を読み進めていく。最後にもう一度発言を求め、次回へとつなぐ。



なかなか手が挙がらない中、先生から指名を受けて発言する生徒たち。ボツリボツリと、しかし真剣な思いが口をついてこぼれはじめた。



チャットルームでの対話中も、生徒たちへ声かけを欠かさない坂本先生。『たわるねつとTeen's』で複数のチャットルームの様子を一覧しながら、生徒たちの思いを引き出す絶妙の「合の手」を入れている。



今回の授業で「対話のタネ」となったのは、クラスの生徒が書いた日誌の記事。伝統的に道徳教育を重視してきた上田中では「生活記録日誌」というノートを毎日担任に提出、添削を受ける習慣づけがなされている。

か挙手や自発的な発言には至らなかったが、その中身が、この短い時間の中で刻々と変わつていったことは、見ていた私たちもよく分かった。

他人の思いを自分のこととして受け止める心。それが手に入れば、他人の痛みを、悩みを知つて平気であることはできない。そんな「動く心、揺れる心」を生徒たちはこの時間に実感したのではないだろうか。

本当に大切なものを 育てたい

この日の授業は、私たちにもいろいろなことを考えさせてくれた。

現代の若者のコミュニケーションについて語るとき、その多くは言葉による対話が失われ、メールやネットでの文字情報に偏つた、ゆがんだものだというニュアンスで語られる。

しかし、この日の授業では、言葉によるコミュニケーションと文字によるそれが、互いに絡み合いながら、生徒たちの思いをあらわにし、波立て、新たな思いに目を見開かせていった。

話すことは、書くことより常に上位にあるのだろうか。文字によるコミュニケーションは、会話というコミュニケーションに劣るものなのだろうか。

授業の後、坂本先生にお話を伺った。「何でも口に出して話せる、という学級



ここで先生は、生徒たちに挙手発言を求めたが、掲示板上下には発言が得られない状態。「手の挙げ方には生徒の気持ちが出る」とは、関西学院大学の横山教授(P20参照)の言葉だが、まさにそれを地で行くさまが見て取れる。



「思いを言葉にできないのはどうか」坂本先生の次なる問いに、今度は掲示板を使って生徒たちの思いが寄せられていく。「自分だったらどう思うだろう」与えられたテーマが次第に「わが事」に変わっていく。

思えた。ハンドルネームを使った匿名参加ながら、その実、生徒たちはお互いが誰かを分かつて会話をしているようだ。例えそうであっても、面と向かつて口にするのとは違う姿勢で互いに向き合い、言葉を交わすことをこの場が可能にしているのが興味深い。この授業で使われた日誌文の主が誰かということも、おそらく生徒たちにはもう分かっているのだろうな、とここで気づいた。

ひとしきり盛り上がったチャットルームの終了を告げ、坂本先生は、これまで隠されていた日誌文のラストを写す。

「これからは、腰をすえてじっくり練習したい。じゃなくする。(中略)私は3—4の仲間を信じぬくことをちかいます！」

生徒たちは、じつと画面に見入っている。坂本先生は、授業の最後に言いたいことはないかと挙手を求めた——挙手なし。「これが、このクラスの課題だよね」

先生はそう言つたが、その表情はやわらかな笑顔だった。授業の冒頭、中ほど、そして最後。なかなか

を生徒たちが共有できるということをや大にしたいですね」

重要なカギは、この授業が「道徳」というその原点にあつた。望ましいとされる行動を「させる」ことではなく、望ましい行動につながる心性をこそ大切に育てるという道徳の本旨(P20記事も参照)を思えば、坂本先生の方針との調和がよく理解できる。音楽など他教科の授業や、合唱コンクールなどの行事が、混然一体となつて生徒の心を育てていることもまた、まさしく道徳教育の王道と言えるだろう。